

かすが会ニュース

第4号

発行日 平成8年11月24日

発行元 かすが会 広報室

酒の文化史

顧問 牧田 茂

日本では、むかしから酒を管理するのは女性だった。

杜氏と言うのは酒に関係ある人なら知らない人のない言葉だが、これはもともと家々のおかみさん、つまり自からでた言葉である。

大嘗祭（おうにえのまつり：天皇即位後の新酒などをもって行う祭儀。毎年11月23日に行う祭儀は新嘗祭）のときは郡領の娘が造酒子に定められたが、造酒子は地位の高い巫女（神に仕える女）であった。造酒子の下に酒波一人、篩粉一人、共造二人、多明酒波が一人であるが、これらはみな酒に関する巫女であった。

男の方は稻実の君が定められた。酒と米との役人である。

平安中期の「更級日記」（菅原孝標女の生涯にわたる日記）をみると、武藏国では「國に七つ三つくりすえたる酒壺に」と出ているように酒は甕のなかでつくって、甕は土中に据えてあった。

今でも四国・九州などの多くの土地で、酒宴の翌日とか翌々日に、手伝いに来てもらった人や家のものを集めて懇親の飲食を出すことを「瓶底飲み」とか「瓶こなし」とかいっている。東北では「残酒」という言葉も使われているが、宴会のために用意された酒はこの際まで底まで飲みつくして瓶をころがすという意味であった。

鎌倉・室町時代になんでも酒が甕の中でつくりこまれていたことは、建長4年（1253）鎌倉中の酒壺を幕府で調べたところ、なんと37、274個もあったので、そのうち各戸に1個ずつ残して、他は全部廃棄させたことが「吾妻鑑」（鎌倉幕府の創始期から中期の事跡を記した歴史書）に見えている。

女性が酒にかかわりのあることを私は昭和53年（1978）の秋に沖縄の久高島で見ることができた。この島で12年に一度、午歳の旧暦11月、満月の夜から3日3晩にわたり行われる「イザイホー」という神事のときである。

30歳に達した島の女性が、3日3晩小屋にこもって村の神をまつる巫女の集団に加わることを認証される祭りなのだが、その2日目にヤジクという地位の女たちが村に2軒あるノロ（巫女）の家に分かれてウンサクという酒をつくるのであった。

むかしはウンサクの女性たちによって呑み酒をつくったと伝えられていた。

祭りの4日目はウケマーリ（桶回り）というのだが、この日午歳生まれのナンチユ（巫女の地位を示す言葉）がクバの葉を肩にかざして、ウンサクの桶のまわりを踊ったのち、ウンサクを汲み上げて神に献じ、ノロ（巫女）以下の神人から見物人にもふるまつた。

酒とはいえない、のりのようなものであったが、それを頂きながら酒と女性との長い歴史もこの神事の絶えるときにはもう日本にも存在しなくなるのではないかと、さみしい想いがした。この午歳の祭りはこれを最後に行われていない。

（まきたしげる・民俗学者）

雪の松島（宮城酒類=宮城県）

- ・蔵主：佐浦茂雄（7代目）
- ・杜氏：小田嶋強一（南部・67才）
- ・創業：昭和25年（1950）
- ・由来：日本三景の一つ“松島”にあやかり、地方を代表する酒。



同社は、県内の清酒会社が株主となり醸造アルコール生産のために設立されたが、昭和33年より清酒の生産を開始した。設立の主旨から県内より首都圏を中心とし、米国、英国でも販売されている。

現在の蔵は、昭和59年に良い水・良い空気を求めて泉パークタウン工業団地内（仙台駅から40分）に建設された。団地内には蒲鉾、乳業などの食品会社の他に半導体工場等がある。いずれも“良い水・空気”が必修条件である。

杜氏、小田嶋強一氏は南部杜氏協会の副会長とともに今年度、“現代の名工”に選ばれている。同氏は清酒の生産開始と同時に入社し、52年間の酒造りの技能を結集し日本一辛く、しかも味がありながら軽く飲める酒“超辛+20”を完成させた。また地場の米で地酒を造る研究も手掛け、食用としては美味しいが酒米としてはむかないとされていた粘りのある宮城ササニシキを100%使った純米酒も成功している。

米の持ち味を出来るだけ引き出すことを重点に「くるみ味」の乗つた旨酒造りを信念としている。

かすが会と私

副会長 吉倉孝也

花巻、東京、赤城、九州、柏、伊達と33年間の会社生活をとおして各地を遍歴し、変化に富んだ道を歩いてきた。この9月に再び柏に戻り定年を迎えた。

久し振りに写真の整理をしていたら、昭和56年頃の“かすが会（みちぐさ）”の写真が出てきた。梁取さん、中村社長、森口会長をはじめ会員の皆様もまだ若々しく、当時まだ珍しかった吟醸酒、純米酒などを一生懸命勉強し普及に努力していた。

今は、梁取さん、高橋さんも亡くなり、私も含めて何人かの方々も定年を迎えていたり職場も変わっている。かすが会も若い人達や女性の会員が増えた。

この間に日本酒はどう変わって來ただろうか。

各蔵元さんも高品質酒に力を入れはじめたため、吟醸酒、純米酒などが手軽に手に入る様になると共に、季節に關係なく冷酒がのまれる様になった。

金さえ出せば、素晴らしい酒が何時でも飲めるし、本物の日本酒を揃える酒販店や料理屋がどんどん増えた。大変結構なことだ。

今日の市場は、ヤングギャルがターゲットであり、日本酒業界もこれをいかにつかむかが焦点とされている。アルコール分1.2%台の製品も始めたが、これからはもっともっと工夫をこらしたもののが出てきそうである。飲み方も日本酒のカクテルを出すところもあり、多様化が益々進むと思われる。

私達のかすが会では、日本民族の国酒である日本酒を創出する方々に“我が伝統産業を担う誇りと、その責任”を持ち続けていただくように、独自の酒米を研究し育成するとか、品質本位の特徴ある酒を醸すなど地道に本物の酒造に努力している人達などを今後とも応援していきたいと思っている。

（よしくら・たかや）

会員募集

かすが会の会員を募集しています。

- 条件：本物の日本酒を愛する人（一般会員、蔵元会員）
- 会費：3,000円（1年間）
- 申込み：工藤貞儀（事務局）
(fax:0471-47-7633)

次回の案内

・日時：平成9年3月16日（日）

午後2時より

・会場：東京・新宿

・会費：4,000円（メンバ）

5,000円（ビギナー）

・企画：総会、新酒を楽しむ（予定）

第3回 かすが会例会

平成8年11月24日（日）午後2時より鈴木屋本店において第3回 かすが会例会を開催します。今回は、宮城県「雪の松島」と和歌山県「菊御代」の蔵元さんを囲んでの例会です。蔵元さんの概要は下記の通りです。（文責：かすが会・広報室）

菊御代（名手酒造=和歌山県）

- ・蔵主：名手久雄（4代目）
- ・杜氏：井上秀則（但馬・62才）
- ・創業：慶応2年（1866）
- ・由来：菊は南北朝時代の南朝方を意味し、朝廷の治世（御代）安泰を願う。



蔵は、紀州徳川・55万5千石の城下町（和歌山市）とミカンで有名な有田市にはさまれた海南市黒江にある。前は紀伊水道・和歌浦に面し後方は高野山を背に、紀ノ川と有田川で囲まれ、熊野詣の道、旧熊野街道（熊野古道）沿いに蔵がある。

黒江は津、輪島となる漆器の町で白壁、板張の職人家屋がジグザグに規則正しく並ぶ細い路地はノスタルジックである。

和歌山県の酒は、江戸時代末期から但馬杜氏が主流となって酒造を伝承してきたが灘、伏見が近く市場が荒らされ経済酒中心との評価があるが、名手酒造では酒造好適米の契約栽培に取り組みながら高品質化をすすめている。又、“温故伝承館”を建設し江戸時代から伝わる酒造道具などを展示など酒文化を発信している。

杜氏、井上秀則氏は18才から酒造に携わり42才で杜氏となり蔵人とのチームワークと丁寧な造りを信条としている。酒質は、全般にやわらかできめ細かい味わいを特徴としているが、純米酒は華やかではないがやわらかい香りがありふくらみの味がある。本醸造酒は旨口で飲みあきしない調整タイプ。

平成8年度第2回かりか会例会の報告

平成8年9月15日（日曜日）午後2時より鈴木屋本店において、平成8年度第2回かりか会例会を開催しました。

今回は「蔵元を囲んで」と題した座談会を、東北地方と中部地方の各一社、一つの蔵元をお招きして、約60名の参加を得て実施しました。

初めに森口嘉雄かすが会々長、続いて中村国夫春日や社長のご挨拶の後、内山幸二かすが会顧問の司会で、蔵元を囲む座談会に入りました。

お話を頂いた蔵元は次の二社です。

『沢の泉』 石越酒造株式会社（宮城県）の菅原専務取締役、
『花の舞』 花の舞酒造株式会社（静岡県）の山下取締役製造部長、

お伺いした話のポイントは、会員からの質問も含めて下記の通りです。

- 蔵の創業時期と創業のきっかけ、その後の発展の様子について。
- 蔵の現在のロケーション、近郷の様子や気候の特長について。
- どうじの出身地と酒造りへの考え方、後継者問題とその対策について。
- 今年の酒造米の出来具合や、使用米の種類と調達状況について。
- 経営の方針、考え方、出身職業、特長等々について。
- 新しい酒造米の開発状況と今後の見通しについて。
- 金賞受賞までの苦労話や裏話について。

各々の項目について詳しくご説明頂き、一つの蔵の特長がはつきり出て、大変興味深い座談会となり、熱心な質問が続きました。

3時頃から牧田茂かすが会顧問の音頭で乾杯を行ない、恒例の宴会に入りました。

宴會では『沢の泉』と『花の舞』の酒を中心に比較試飲が行われ、大いに飲み、大いに食べて楽しいひとときを過ごし、吉倉孝也かすが会副会長の締めの挨拶で夕方6時近くに終了しました。

写真の説明（上から順に）

- 1 挨拶する森口かすが会々長（左） 専務結婚の御礼 中村春日や社長（右）
- 2 乾杯音頭牧田かすが会顧問（左） 座談会の司会 内山かすが会顧問（右）
- 3 沢の泉 菅原専務取締役（左） 花の舞 山下取締役製造部長（右）
- 4 「蔵元を囲んで」の座談会（左） 挨拶する吉倉かすが会副会長（右）
- 5 『沢の泉』と『花の舞』から出品されたいいろいろなお酒

